様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２９ 日現在

機関番号：２３５０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2016
課題番号：２５７８０３０８

研究課題名（和文）ベルギー多言語地域の文化・社会活動にみられる「複属」の検討

研究課題名（英文）On "Multiple Participation" for Cultural/Social Activities in the Multi-Language Area of Belgium

研究代表者
山口　博史（Yamaguchi, Hiroshi）

都留文科大学・その他部局等・准教授

研究者番号：７０５７２２７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：この研究は、ベルギーの首都ブリュッセル周辺地域を主たる対象とした。この地域は元来オランダ語話者の居住が多い地域であった。ブリュッセルの拡大にともない、都市中心部から周辺部に人口の移動が生じた。この移動人口にはフランス語話者が少なくなかった。この研究ではこうした移住者の状況把握につとめた。そしてこの地域への移住者のライフヒストリー、とりわけオランダ語話者とフランス語話者の間に立つ形で市民活動に取り組む人びとに聞き取りを行なった。その結果、蘭仏語の区切りとは違う区切りによることで、両言語集団間のつながりが維持されていることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The research focused mainly on the outlying areas of Brussels, Belgium for this study. Dutch speakers were historically the majority in this region. However, by the enlargement of the city, the inhabitants of Brussels "migrated" from the center of Brussels to the suburbs. There were considerable numbers of French speakers among these "migrants". We researched the general situations of the "migrants" and interviewed migrants' life histories in this area, especially those who worked in civil societies between French and Dutch speakers. As a consequence of this study, we clarified that non-language categorization plays an important role in ties between the two groups.

研究分野：社会学

キーワード：逆都市化　集団の境界

１．研究開始当初の背景

ベルギーはオランダ語圏とフランス語圏、そして東部の一部にドイツ語圏を擁する多言語国家である。ベルギーでは独立から長きにわたりオランダ語、フランス語話者の間でのコンフリクト（いわゆるベルギーの言語紛争）があった。

ベルギーの言語紛争は、フランス語圏とオランダ語圏の対立ととらえる見方が主流であった。そうした見方には現在でも一定の説得力がある。近年ではそれに加えて、フランス語話者とオランダ語話者の混住地域をめぐる問題系が注目されつつある。この研究はベルギーの多言語地域を事例に、エスニック境界を越える人びとの行為に着目し、そうした行為の社会的背景の解明をめざすものであった。

対象としたのはベルギーの首都、ブリュッセル周辺地域である。ブリュッセルはフランス語話者の多い町であり、蘭仏二言語圏である。ブリュッセル周辺地域は、かつてはオランダ語話者が大多数を占める地域だった。いうなれば、ブリュッセルはオランダ語話者が多く住む地域にとりまかれたような格好になっていた。ブリュッセル都市圏の拡大にともない、市内から都市周辺地域のオランダ語圏に多くの人が移り住んできた（ベルギー統計局のデータによれば、1947 年を 1 とすると 2011 年には 1.7 倍あまりになっている）。この移住者は少なからずフランス語話者が占めていた。都市の拡大と都市周辺地域への移住者の増加によって、旧住民たるオランダ語話者と新住民のフランス語話者が接触する状況が生まれた。現在、ブリュッセル周辺の地域は、言語政策的にはオランダ語圏である（とはいえフランス語で行政手続きを行なうことが可能などフランス語話者へのあるていどの便益が提供されている自治体もある）。つまりオランダ語圏内にブリュッセルから移住してきたフランス語話者が少なからず住んでいるのである。

本研究ではこの地域で、オランダ語、フランス語の両言語話者が置かれている状況の把握に一方でつとめることとした。そしてとくに企図したのは、この地域で両言語集団間の紐帯が（必ずしも多くないとはいえ）どのように形作られているか、またその担い手についての研究であった。

２．研究の目的

この研究の目的は、言語的多様性が高い地域での、言語集団間接触の諸相を明らかにすることにあった。そのなかでもとくに、オランダ語・フランス語話者の間に立つ人びとの自発的市民活動に着目し、それがいかなる社会的背景のもとにあるか（本人や家族の属性、職業経験や様々な社会活動経験など）を明らかにするのが重要であった。またその集団間接触がいかなるインパクトを各々の集団や社会にもたらすかを検討していくことも研究の射程にとらえていた。

３．研究の方法

この研究ではオランダ語、フランス語話者の間に立って活動をする人びとがいかなる背景のもとにそれに取り組んでいるかを解明することを目指した。

そのため、そうした人びとのライフヒストリーを丹念に聞き取っていくことを通じて、担い手のバックグラウンドを検討することをめざした。現地でフィールドワークを行ない、じっさいにそうした人びとに会ってインタビューを行なっていくことにした。深い話を聞き取るためにはよいラポールが重要である。この形成にもつとめることにした。

またライフヒストリーを聞き取り、解釈していくときにはその語りの背景となっている歴史や地域・社会の特性、語り手の社会経済的状況などさまざまな要素を考慮する必要がある。このため、ベルギーの社会事情について、聞きとりと合わせて並行的に研究を進めていくことにした。

聞き取りにあたってとくに力を入れたのは対象者のこれまでの人生の歩み、生活経験および関わりのある自発的活動団体の性格の分析であった。この聞き取りを通じて、対象者がどういった構造のもとにおかれているかを明らかにするようつとめた。

４．研究成果

インタビューで得られたライフヒストリーの語り、またインタビュー対象者の人生の歩みをそのまま一般化することはできない。同時に、ライフヒストリーをもとにしてそれらの人びとがどういう社会構造のもとにあるかを把握することには大きな意味がある。このことから、ライフヒストリーの検討にあたっては、制度、社会集団との相互作用など、個別性の高い状況と社会構造がどのように結びついているかを念頭におきながら検討を進めた。結果的に、単なる聞き取りだけにとどまらず、ベルギー社会の状況についてのさまざまな角度からの再検討の必要性があらためて認識された。そうした研究の結果、次のようなことが明らかになった。

まず、ベルギー言語政策の意味づけについてである。ブリュッセル周辺地域の言語政策は移住が始まって時間が経過してから（一つの見方によれば 20 世紀半ばから徐々に）適用された。そのため、この地域に移住した人びと（とくにフランス語話者）にとっては居住実態が変わらなくとも居住区域に関係する言語政策が少しずつ厳しいものになってきたというとらえ方がみられた（雑誌論文(2)）。これは、ブリュッセルからのフランス語話者の移住にかんしてオランダ語話者の側から「油じみ」といわれていた現象をフランス語話者の側からとらえることにつながるものである。

これはブリュッセルという都市の外縁の

境界についての視角につながる。都市の境界が再設定（実際は境界性強化）されることで、外縁の境界性に関して独特な色合いを持つ都市にブリュッセルは変貌した。この視角は世界の類似都市・事例との比較研究に道を開く契機となった（学会発表(4)、雑誌論文(2)）。

ブリュッセルの都市構造という点からみると、この町はかつて逆都市化の一つの事例として取り上げられたことがある（Van den Berg, Leo et *al.*, 1982, *Urban Europe: A Study of Growth and Decline*, Pergamon Press.）。この分析はマクロ面（人口・産業など）についてのものであったが、ライフヒストリーの聞き取りからより詳しく、住民の暮らしの目線からの（ブリュッセルの）逆都市化についての視角が開かれた。とくに都市境界が住民にはどのように意味づけられているかというポイントが重要であった（雑誌論文(2)、雑誌論文(3)）。

ブリュッセルとその周辺地域の境界標識

（学会発表(6)予稿集 p.50 より縮小再掲）

対象者のライフヒストリーを解釈するにあたり、当然ながら個人的要因と社会構造に起因する要因を分析的にとらえる必要がある。個人特性としては対象者の性格的特徴、長い年月を経て培われた問題関心のほか、交友関係、言語能力などとならんで、先にあげたブリュッセルの町とその境界についての意味づけがあげられるだろう。社会構造に関係する部分としては、ベルギーの社会制度やマクロ面での動態、対象者が生きてきた時代の背景といった要素がそれぞれの人生の歩みにいかなる影響を及ぼしたのかを問うことが重要である。また、個人的要因と社会構造とをつなぐポイントとして、ベルギーに特徴的な諸社会集団との関係が、それぞれの人びとの歩みにどう影響したのかということもあげられるだろう。

個人的要因のうち、聞き取りを進めるなかでとくに着目したのは転居の経験である。転居経験は、ブリュッセル周辺地域に移住した当人の状況と、同地域の社会環境を結びつける重要なステップだからである。転居にはさまざまなパターンが考えられる。ブリュッセル市内から周辺地域に転居したケースでは、転居先をブリュッセルの延長と感得するケースがあった。先に述べたように、これは居住地をどのようにとらえるかがそこでの活動のありかたに大枠で影響を与える可能性を示すものといえるだろう。この点は逆都市化というブリュッセルがかつて経験した都市構造の変化ともつながっている。逆都市化は単なる都市周辺地域への人口などの移動現象ではなく、ひとつの都市という意味付けがなされる範囲の拡大という要素があることを見出すことができた。ブリュッセルではここに集団間境界の問題系が交差する（雑誌論文(2)）。

また、ライフヒストリーの聞き取りにより、両言語集団の間に立つ人びととその活動の契機のひとつに、言語によらない活動形成の枠組みがある事例が確認できた。今回の研究でとくに着目したのは、環境と地域という枠組みであった（雑誌論文(1)、雑誌論文(3)）。

以上のことから、両言語集団の間に立つ人は相当程度限られた社会的バックグラウンドのもとにあることが明らかになった。言語能力、両言語集団の間に立つことに親和的な人生経験、言語集団を横断するような活動形成の枠組みといった要素が転居経験を通じて両言語話者集団のなかだちをすることにつながるにいたるには、ハードルが少なくない。これが、言語集団の間に立つ活動が容易ではない理由のひとつであるとみられる（雑誌論文(1)）。

ライフヒストリーの語りを理解するためにはきわめて幅広い情報が必要となるのは論をまたない。各々のライフヒストリーの解釈を深めるため、この点にとりくむことでライフヒストリー研究の意義はさらに大きくなる。一例をあげれば、今回聞き取りを行なった対象者の中には戦中を生きた人物も含まれていた。そのため第二次世界大戦下の状況、また戦後の欧州とベルギーの歩みについても留意をしながら聞き取りとその解釈を進め、現代の状況とのつながりを明らかにしていくことになった（雑誌論文(1)）。そのほか、戦中の体験にとどまらず、何気ない語りの中にもベルギー社会の特徴が反映されていることはしばしばある。例えば報告学会発表(5)ではさまざまな語りの中からとくにベルギーの「ライシテ」についてのものをとりあげた。これにより一層深くライフヒストリーを解釈することができた。

そのほか、ライフヒストリーにかかわるアカデミック・コミュニティの立ち上げにもこの研究活動と並行して取り組み、本研究の深化につとめた。

そして、この研究を進めるなかで得られたさらに大きな問いとして、ブリュッセルとその周辺地域をとりまく三つの社会的力学の

影響についてのものがある。ここまで述べてきた言語集団間にはたらく力学のほか、ベルギーという国家をめぐる力学、そして欧州（ブリュッセルは欧州の首都でもある）の統合という流れがある。これらの諸潮流は、今後、本研究の対象とした集団間接触にいかなる影響を及ぼしていくだろうか。この問いについては継続的に調査を行ない、状況の変化をフォローしていくことが重要になるだろう。また本研究で得られたブリュッセルの外縁がもつ境界的性格に着目し、類似の性格を持つ諸都市、地域との比較研究に今後継続的に取り組んでいく考えである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
(1) 山口博史，2015，「ベルギーの多言語地域で生きる」，名古屋大学社会学論集，35: 119-146.（査読あり）

(2) 山口博史，2016，「現代ベルギー言語紛争を生きる」，名古屋大学社会学論集，36: 97-116.（査読あり）

(3) 山口博史，2016，「出身国の特性と日本留学の経験」，留学生交流・指導研究，18: 57-70.（査読あり）

〔学会発表〕（計６件）
(1) 山口博史，2014/11/22，「都市の郊外化と言語境界線：ブリュッセル周辺の多言語地域の事例から」，第 87 回日本社会学会大会（於・神戸大学（兵庫県神戸市））.

(2) YAMAGUCHI, Hiroshi ，2015/5/31，“Who Chooses Japan?: Japanese Social Sciences and International Student Exchange in a Globalizing World”，The 22nd IFSSO International Conference 2015（於・成城大学（東京都世田谷区））.

(3) 山口博史，2015/7/26，「留学経験者のライフヒストリーからみるベルギー社会」，第 61 回ベルギー研究会（於・明治大学（東京都千代田区））.

(4) 山口博史，2015/10/31，「都市の境界「再」形成と多文化社会の変容：ベルギー・ブリュッセル周辺地域の事例から」，グローカル社会理論フォーラム（於・成城大学（東京都世田谷区））.

(5) 山口博史，2016/8/6，「ベルギーの『ライシテ』：あるライフヒストリー・インタビューからの接近」，第 66 回ベルギー研究会（於・明治大学（東京都千代田区））.

(6) 山口博史，2016/12/11，「都市圏外への移住経験を聞き取る：ブリュッセルの郊外化・逆都市化過程から」，日白修好 150 周年記念シンポジウム　「文化・知の多層性と越境性へのまなざし：学際的交流と『ベルギー学』の構築を目指して」（於・東京理科大学（東京都千代田区））

〔図書〕（計１件）

(1) YAMAGUCHI, Hiroshi 2014, “Kingdom of Belgium”, *GWEC Editorial Working Committee (ed.)*, Suirensha, 596-599.

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
山口 博史（YAMAGUCHI, Hiroshi）
都留文科大学・その他部局等・准教授
研究者番号：70572270

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし